

日本とタイの互助慣行の比較 —東北部と北部の農山村を中心に—

流通経済大学 恩田守雄

1. 目的

本報告の目的は田植えなどの労力交換のユイ（互酬的行為）、道路補修などの共同作業や共有地（コモンズ）の維持管理のモヤイ（再分配的行為）、冠婚葬祭のテツダイ（支援＜援助＞的行為）という日本の互助慣行について（恩田,2006;Onda,2013）、タイと比較し相違点と類似点を明らかにすることである。これは東南アジア的な互助ネットワークを考察することでもある。

2. 方法

上記の目的を達成するため日本とタイの互助関連の文献を精読し現地調査を行った。2017年8月に東北部コンケン近郊の農村、北部チェンマイ近郊の山村、2018年3月に北部チェンライ県メーサイ郡のアカ族山村、チェンセーン郡の農村、少数民族（タイ＜ルー＞族、アカ族、ラフ族、ルア族、タイヤイ＜シャン＞族）共生の山村で聞き取り（半構造化インタビュー）を行った。既に韓国（第85回報告）、中国、台湾（第87回報告）を調査し東アジアの互助慣行として発表した（第88回報告）、本報告はフィリピン（第89回報告）、インドネシア（第90回報告）の研究の延長上にある。

3. 結果

タイの互助慣行は日本同様近代化の過程で衰退しつつあるが、村落ではまだ伝統的な互助行為によるつながりや絆が見られる。特に親族関係という血縁の系譜だけでなく地縁関係を中心に互助ネットワークが存続している。タイ人の農村では日本のユイにあたるローンケーキ（労力交換）が機械化により衰退しているが一部まだ見られる。チェンマイ近郊の山村では仏教の教えに基づく「開発僧」による農村開発が進められている。アカ族の山村ではケシからコーヒーへの転作で発展する一方伝統的な文化の継承が困難になっている。共同作業はどの村落でも見られ地域住民の一体感が維持されている。金銭的支援として小口金融のシェア（レンシェア）は行われていない。もともと中国の「社」がタイの中産階級に普及し利息志向が強い。この点東アジアや他の東南アジアとは性格が異なる。婚葬儀はシュアイ（help）という言葉で手助けがされ、少数民族では各出身地の生活様式が投影されている。その一方でタイ国籍取得の問題が少数民族の村落では大きく、全体としてタイ人のナショナル・アイデンティティがエスニック・アイデンティティに代わる面も否定できない。

4. 結論

タイではガーンシューイルアスンガンレガン（ガーンシューイルアは手助け、スンガンレガンは共有の意味）という相互扶助の言葉があり、思いやり（ナムチャイ）の心が言われている。困窮者への救済では協同組合（サハゴーン）の利用が多く、公助や自助への要請は急速に進む近代化の証左とも言える。調査した農村では共有地（コモンズ）はほとんどないが、アカ族では保護森、収穫森、神聖森があり環境保全がされている。共同作業ではタイ人も少数民族も不参加の場合過怠金を科す点は日本と同じである。タイでは日本と異なり集団主義より個人志向も強いが、少数民族では自民族の共益を意識した互助ネットワークがまだ健在である。今回の知見を踏まえ東アジアとの比較も念頭に東南アジアに通底する互助慣行の解明が今後の課題である（科学研究費助成事業＜学術研究助成基金助成金＞：平成27年度～31年度、基盤研究C、研究課題「日本と東南アジアの互助ネットワークの民俗社会学的国際比較研究」、課題番号15K03860、研究代表者＜個人研究＞恩田守雄）。

＜参考文献＞

恩田守雄、2006『互助社会論』世界思想社。

Onda, Morio. 2013. 'Mutual help networks and social transformation in Japan,' *American Journal of Economics and Sociology*, 71(3):531-564.